

このワークには、主につぎのような学習目的があります。

- ① 日本語の文法や表現に対する感受性を高める
- ② 自分の言語運用の知識化
- ③ 文章の読みの力を高める
- ④ 誤りの発見と訂正を通して注意力や心理洞察の力を高める。

以下、この4点について説明します。

① 日本語の文法や表現に対する感受性を高める

たとえば、[事故をあった][靴は重いない][電気が消えまっくろ]などは、その1文だけで誤りが判定できる文法や語彙の誤用です。これらの誤用に出会ったとき、私たちは、まず“直感的”にその文に違和感を感じます。このワークの狙いのひとつは、そのような日本語に対する感受性を高めることにあります。誤りの箇所に触れ「何か変だな」と、感じられるようになってほしいと思います。

② 自分の言語運用の知識化

誤りに気づいた後、今度はそれをどのように訂正すべきか、の検討に入るわけですが、それは、自分自身の日本語の運用を“意識的”に振り返る作業となります。(例：事故をあった・ん？事故があった、だよな) 日ごろ無意識に運用していることばの意識化・知識化が、より高度なことばの学習への取り組みに不可欠だと考えています。

③ 文章の読みの力を高める

誤りの発見→訂正の作業は、“直感→意識”へのプロセスと考えることができますが、このプロセスを支えるのが、「読み」の確かさです。まず誤り発見のためには、文章の正確かつ流暢な読みが重要です。たどたどしい読みや不正確な読みでは、誤り部分に“変だな”というひっかかりを感じにくいからです。そしてつぎの作業となる誤りの訂正には、今度は文章全体の意味を把握する読解力が求められます。文章中に設定されている誤りの多くは、文脈との関係で、その正誤が判定され、そして訂正すべき表現が決まるものです。たとえば、[ヒロシ、まだ8時よ。]という文はこの1文自体に誤りはありませんが、その後[早くしないと遅刻するよ。]という文が続いていれば、「まだ」は誤りであり、「もう」に訂正しなければならないことが解ります。(間違いを見つけてやろう!)という意欲が、正確に文章を読み取ろうとする意識を高めると考えています。

④ 誤りの発見と訂正を通して注意力や心理洞察の力を高める。

誤り発見に失敗するケースとして多いのが[文章を無意識に正しく読んでしまっている]場合です。“間違い探し”なのですから、文字を正確に目で追わなければなりません。読みにおける注意力を育てるということも、このワークの大切な目的です。◆また問題を続けていくと、誤りには、いくつかのタイプがあることが解ってくるはずですが、あげもらいエラー/反対語エラー/こそあどエラー等々です。タイプの存在に気づくと、誤りのありそうな箇所の予測もできるようになりますが、それは出題者の心を意識することに繋がっています。(ひっかからないぞ!)という気持ちで問題と対峙出来るようになってほしいと思います。